

一

次の各文の——部について、1～5のカタカナは漢字に直し、6～10は読み方をひらがなで書きなさい。

- 1 ジョウシキはずれの行動をとる。
- 2 地域のフツコウが進む。
- 3 フクザツな事情がある。
- 4 時代の波にサカラう。
- 5 引越しにお金がいる。
- 6 二人の類似点をさがす。
- 7 税金が軽減される。
- 8 弁舌がさわやかな人だ。
- 9 よい方向に導くことだ。
- 10 会社を営む。

二

次の文の——部の言葉の使い方が正しいものには○、あやまっているものには×を解答らんに書きなさい。

- 1 相手の気合いにいそしむ。
- 2 努力をねぎらう言葉をかける。
- 3 他人に意見するのはいかめしい。
- 4 一人でやるせない思いに沈む。
- 5 発言にはいぶかしい点がある。
- 6 いやおうなく参加させられた。
- 7 つつましい数の鳥がいる。
- 8 敵をたしなめたら負けてしまう。
- 9 やおら間に合うだろう。
- 10 道理をわきまえる。

三

次の文の（ ）の中には二字をくり返す言葉が入ります。例にならって意味の通る文にしなさい。

(例) 会議が(えんえん)と続く。

- 1 このまま()と引き下がれない。
- 2 この手は相手には()である。
- 3 部屋のライトが()とついている。
- 4 自分の気持ちを()と語る。
- 5 親の意見を仕方なく()受け入れる。
- 6 この家は()私のものになる。
- 7 けんかは()にしなさいと言われた。
- 8 あぶないので、ここから()に引きあげた。
- 9 ()ならない決意だ。
- 10 ()寝てもいられない。

四

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

地球上に最初の植物であるシダ類が生まれたのは、いまから数億年前、古生代といわれています。その後、針葉植物の祖先となる木本性裸子植物が生まれ、そして最後に、私たちの食糧となる農作物の祖先、草本性被子植物が生まれました。被子植物がふえはじめたのは、いまから約一〇〇万年前といわれています。やがて生まれた私たち人類の祖先は、それらの「野生植物」を食糧として生活をしていたのです。しかし野生植物は、人類にとって必ずしもつごうのよいことばかりではありませんでした。まとまってたくさん生えていないために、すぐ採りつくしたり、ほかの動物たちに先に食べられてしまつて、ひもじい思いをすることもあったでしょう。また収穫量が少ないとか、おいしくないとかいったこともあったでしょう。

① このようなつごうを解決するために、やがて私たちの祖先は、野生植物を「人の手で育て」、さらにそれを改良して、「栽培植物」にかえることを考えだしました。これは、人類の歴史と文化をかえた、非常に大きなできごとです。野生にあるものをそのまま利用するだけでなく、③それを自分たちの

生活に、よりつごうのよいものに、自分たちの力で変えようと努力したのです。これが、④私たち人類が他の動物たちと根本的に違う資質です。そして長い歳月をかけて、人類は「植物の改良」を重ね続けたのです。ですから栽培植物は、いわば私たちの祖先の「文化遺産」であり、⑤私たちが毎日食べているお米や野菜や果物には、祖先たちの汗と涙の歴史が秘められていることを忘れてはいけません。

植物を畑で栽培できれば、それまでのように、野生植物のたくさん生えているところを探して、あちこち移動する必要がありません。⑥一定の場所に一定の人数が住みついて、安定した生活ができるようになります。すると、みんなで相談する時間ができ、よりよい栽培植物をつくるための知恵や技術も生まれます。収穫量があがり、狭い土地でも多くの人口を養うことができるようになります。人口が増え、生活が安定すると、そこに新しい文化が生まれます。新しい文化は新しい技術を生み、それが栽培植物の改良をいっそう促進します。⑦こうして人類の歴史のブレイク・スルーとなった、「栽培植物による農耕」が始まったのです。それは今から約一万年前のことといわれています。

私たちの祖先は、野生植物のなかから、栽培植物としてつ

五

次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

たなの上の薬箱をかきまわしてみたが、かぜ薬は見つからない。

(そうだ。お医者さんに行ってみよう)

塾の時間には、まだようがあるし、かかりつけの森医院によっても、駅まで、そんなにまわり道にはならない。

とにかく、このままでは、精神的にも追いつめられてしまいそうだ。体のほうだけでも、はやく楽になりたかった。

保険証のある場所はわかっていた。

あゆみは、塾のかばんを持って、あわただしく家を出た。

森医院は、大通りから、すこしわき道に入ったところだ。

いつもなら、病院の前に、患者さんが乗って来た自動車や自転車とまっているのに、きょうは一台もない。

(あれ、どうしたんだろう?)

すぐ目の前まで行つて、ようやくわかった。ドアには紙がしてある。

『院長、学会出席のため、本日休診させていただきます』

「やれやれ……」

立ち止まったらとたん、一枚のかんばんが目に入った。

『内科・小児科・川田医院』

(あれ、こんなところに病院あったっけ?)

そこは、二階建ての洋館ふうの建物だった。つたがからんだりして、かなり古そうな感じだ。外から見るところ、まわりの住宅街にとけこんでしまつて目立たないが、玄関わきのかべにも、こんな板が打ちつけてあった。

『内科・小児科・川田医院』

院長・川田真穂

診療時間……』

(ああ、助かった)

あゆみは、入り口の階段をのぼった。

ふだんのあゆみだったら、ひとりで、通りがかりの病院に入るなんて、けしてしなかっただろう。けれどもいまは、とにかく、このかぜをなんとかしてほしかった。どうしようかなんて、考えるのさえおっくうだ。

いよいよドアをあけるとなると、やっぱりすこしきんちようして、あゆみは、ノブをまわした。

「こんにちは」

一歩中に足をふみいれるのと同時に、声がかかった。静か

あゆみは、ため息をついた。

『「A」または『弱り目にたたり目』だ。あ、なによ、あたしったら、こんなときにまで、ことわざだなんて……』

おかしいような、なさけないような気分だ。

(さて、どうしよう。だいぶはいいけど、塾に行つて、予習室にでもいようかな)

頭をまっすぐあげているのがつらいぐらいに、体が重たいのに、ふしぎと塾を休もうという考えはうかばなかった。もつとも、暗くなるまで、だれもない家にいるよりは、塾にでも行っているほうが、かえって気がまぎれるかもしれないかった。

(こっちの道は、たしかケーキ屋さんとかのあるところだよ。もと来た道をもどるよりは、駅に近そうだな)

あゆみは、ノロノロ歩きだした。

しばらく歩いていううちに、すこし、不安①になってきた。

何度か通っているはずなのに、自転車で、たいしてまわりなんか見ずに走っているせいだ、いま、こうして歩いて行く町並みに、見覚えがないのだ。

(頭がボーッとしてるから、道、まちがえたのかしら? ええと……)

だけれど、やわらかくて、感じのいい声だった。正面の受付の小窓から、おかあさんと同じくらいの年頃の、白衣を着た女の人が、のぞいていた。

「はじめていらした方ですね。どうしました?」

「あの、ちよつとかぜひいたみたいで……」

「そう。ひとりで来たの? 保険証はありますか? えーつとね。それでは、そのいすにかけて、熱をはかってみてくださいね」

あゆみは、わたされた体温計をわきにはさんで、こしをおろした。女の方は、あゆみにいまの症状や、これまでかかった病気のことなどを質問して、カルテになにか書きこんでいるようだった。

女の方のいる部屋は、小窓以外の部分も、ガラス張りになっていて、中がよく見えた。うしろのたなには、薬のびんや缶がならんでいる。となりのしんさつ室とは、奥のドアでつながっているらしく、女の方は、ときどき、呼ばれて立っていったり、またもどつてきて薬を出したり、いそがしく働いていた。テキパキしているのは、おかあさんと同じなのだけれど、なにかふんいきがちがうと、あゆみは、ぼんやりと思つた。

しばらく待って、あゆみの番がきた。

しんさつ室のドアをあけると、あゆみの背の高さくらいの、ついたてがあつて、その奥の机の前に、白衣のお医者さんがすわっていた。お医者さんは、しらが頭の女の人だった。

「あら、まあ……」

女医さんは、あゆみの顔を見るなりいった。

「これは、なによりも、目や耳や、鼻をよく洗わなくちゃいけないわね」

（え？ あたしの顔なにかついてるかしら？）

あゆみは、びっくりして、かべのかがみを見た。すこしはなれてるけれど、かがみにうつって見えるかぎりでは、どこもよごれていないようだ。

「やれやれ。まだ、こんなに小さくてかわいらしいおじょうさんなのにね……。どう？ 町を歩いていて、ちゃんと、まわりにあるものが見えていますか？ いろいろな音がきこえますか？ 物のおいがわかりますか？ あなたの目、いま空の雲はただの雲にしか、道ばたの花は、花そのものにしか見えないでしょう？ 白黒写真は、そのまま白黒写真にしか見えないでしょう？」

「はあ……」

④「いまのところは、いわゆるかげです」

先生は、頭をあげて、あゆみを見た。

「でも、かげは万病のもつていうの。知ってるでしょ？」

すぐうちに帰って、あたたくしてお休みなさい。よく休んで体力を回復するのが一番よ。いまはやっているかげは、熱が出る人が多いから、気をつけてね」

「はい。ありがとうございます」

あゆみは、席を立った。

「あ、あのね」

行きかけたあゆみを、先生は、呼びとめた。

「無理をしてはだめよ。つかれがたまつたままにしておくとかとでたいへんなことになるからね。きょうは、塾なんかもお休みして、まっすぐお帰りなさい」

心の中を見すかされたような気がした。

「はい……」

あゆみは、おじぎをして、しんさつ室を出た。待合室にすわっていると、小窓から、女の人があゆみを呼んだ。

「それじゃあ、これ、お薬ね。一日、三回。お食事のあとで飲んでください。きょうは、苦しかったら、おうちに帰ってすぐ一服飲んで、夜ねる前に、もう一服飲むようにしてもか

あゆみは、わけがわからなくて、答えにつまった。

（鼻は、すこしつまりみだけど……。かげと目や耳も関係あるのかな？ だいいち、雲は、雲にしか、花は、花にしか見えないって、どういう意味？）

③「昔は、こんなになるのは、おとだけだったのに、最近は、子どもにもふえているのよね……。さ、とにかくすわって。ちよつとみせてちょうだいね」

「は、はい」

あゆみはあわてて、先生の前の丸いすにすわった。シャキッとりのきいた、白いカバーがかかっていた。

先生は、それから、むねと背中に聴診器をあて、耳の下をグリグリツとさわったり、のどをみたりした。それがすむと、先生は、カルテに書きこみながらいった。

「とりあえず、二日分お薬をあげます。きょう、あすと、飲んでみて、ようすをみましょう。あさつて、また来てちょうだいね」

「あの……」

この病院は、家から遠いし、あさつても塾があるし、二日分といわず、もつとまとめてお薬をください、といったくて、でも、いえなかった。

まいませんよ」

わたされたのは、粉薬が一種類だけだった。

「また、あさつていらしてくださいね。お大事に。気をつけて帰ってね」

女の人やさしい声におくられて、あゆみは外に出た。

冬の日、暮れるのがはやい。外に出ると、だいぶ暗くなっていた。急にわびしくなった。『はやく帰りなさい』とあったときの先生の目が、去年なくなった、いなかのおばあちゃんの目に、そっくりだったような気がした。

⑤「ごめんなさい。でも、あたし、いま、塾休むわけにいかないんです」

あゆみは、心の中で先生に頭をさげた。

（梅田真理『夢色の風にあかれて』）

まざまに違って当たり前である。さらに詩歌の現場では、視覚や聴覚のみならず、いわば体の全感覚を表現に集中させてゆく^③のだから、いよいよ独創的な世界が拓かれることになる。

木下空太郎は、時計屋の時計の音を「じいん・かつくう」と表現したし、中原中也は、空中ブランコの様子を「ゆあーん ゆよーん ゆやゆよん」と表現した。「時計屋の時計の音」また「空中ブランコの様子」という意味をもつ言葉では決して聞こえてこない、見えてこない音が、映像が、これらの魅力的なオノマトペによって実現されている。

E、前回の比喩^{ひゆ}の場合と同様、^④わかりすぎるオノマトペ、わからなさすぎるオノマトペは潔く棄てた方がいい。比喩もオノマトペも、修辞として読者の直感に強く働きかける力がなければ、詩句としては無力なのだから。(ただし、必ずしも多くの読者の共感を得ることだけが重要なわけではない。一人の優れた評者との出会いが、その表現の価値を決定的にする場合もある。)

(小島ゆかり『短歌入門』)

問一 — 部①とありますが、何を指していますか。本文中からぬき出しなさい。

問二 **A**・**E** にあてはまる適当な語を、次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア つまり イ そして
ウ しかし エ また

問三 **B**・**D** にあてはまる適当な語を本文中の短歌からぬき出して答えなさい。

問四 — 部②とありますが、日本とアメリカで鳴き声が違うのはどうしてですか。説明しなさい。

問五 — 部③とはなぜですか。次の文章の **1** に適当な語を入れ、説明を完成させなさい。

オノマトペは、**1** であり、イメージであり、詩歌の現場では **2** だけでなく、体のすべての感覚を表現に集中させていくから。

問六 — 部④とありますが、なぜ棄てた方がいいと述べているのですか。説明しなさい。

第一回入学試験解答用紙（国語）

――	
6	1
7	2
8	3
9	4
く	ちう
10	5
む	る

三	
6	1
7	2
8	3
9	4
10	5

[illegible]

六					
問六	問五	問四	問三	問一	
	1		B		
	e				
			C		
				問二	
				A	
	2				
				E	
			D		

解答

一

- 1 常識 2 復興 3 複雑 4 逆〔らう〕 5 要〔る〕
6 るいじ 7 けいげん 8 べんぜつ 9 みちび〔く〕 10 いとな〔む〕

二

- 1 × 2 ○ 3 × 4 ○ 5 ○
6 ○ 7 × 8 × 9 × 10 ○

三

- 1 おめおめ 2 みえみえ 3 こうこう 4 せつせつ 5 いやいや
6 ゆくゆく 7 ほどほど 8 そうそう 9 なみなみ 10 おちおち

四

- 問一 ●野生植物は、すぐ採りつくしたり、ほかの動物たちに先に食べられてしまったりすること。
●野生植物は、収穫量が少ないとか、おいしくないということ。
植物を畑で
野生植物
野生のものを自分たちの生活につかうのよいものに変えようと自分たちで努力する力。
1 植物の改良 2 努力
問二 ●みんなで相談する時間ができ、よりよい栽培植物をつくるための知恵や技術が生まれる点。
●収穫量があがり、狭い土地でも多くの人口を養うことができるようになる点。

- 問三 念 1
問四 A 2 B 3 C 5
問五 2
問六 3
問七 5
問八 5
問九 5

五

- 問一 エ
問二 何度か通っているはずなのに、町並みに見覚えがないから。
問三 このかぜをなんとかしてほしかった。
問四 ●町を歩いていて、ちゃんとまわりにあるものが見えていない。
●いろいろな音がきこえない。
●物のにおいがわからない。
●空の雲はただの雲にしか、道ばたの花は花そのものにしか見えない。
●白黒写真は、そのまま白黒写真にしか見えない。
問五 あゆみにつかれがたまっているとうわかったから。
問六 塾を休んでまっすぐ帰れと先生に言われたけれど、塾を休むつもりはないから。

六

- 問一 オノマトペ
問二 A ア E エ
問三 B さくさく C あかあか D たうたらりたうたらり
問四 もともと言葉にはできない音声に言葉を与えているから。
問五 1 意味をもたない音感 2 視覚や聴覚
問六 詩句には、読者の直感に強く働きかける力がないと無力だから。

解説

五

問五

その後の先生の言葉に「つかれがたまっただままにしておくど、あとでたいへんなことになるからね」とあります。あゆみにつかれがたまっていることに先生は気づいていて、「いまのところは」と言ったのです。

六

問六

続く文章で「比喻もオノマトペも、修辭として読者の直感に強く働きかける力がなければ、詩句としては無力なのだから」と述べられています。